

したのに対し、悪い印象へ変化させられたものは視線行動の活動性が低下している。即ち、好意をもった相手に対しての視線は増加し、非好意をもった相手に対しては視線が減少しているといえる。また、Beier & Sternberg (1977) の、新婚夫婦を対象とした実験では、お互いに息が合っていると報告したペアの方が、息が合っていないと報告したペアに比べて、1. お互いに接近して座る、2. お互いに見つめ合うことが多く、しかも時間的にも長い、3. お互いに身体接触をよくする、4. 自分の体に接触する回数は少ない(ストレスや不安感が少ないためと推測できる)、5. 足をオープンな形に組むことが多い、という行動をとった。

大坊(1992)は二者間に親密度評定を行わせ、お互いに親密度が高いと認知し合っている高親密度群と、親密度が高いと認知し合っていない低親密度群とを性別に設定し、男性同士および女性同士の、二者間での対面の会話状況における発言、視線行動とともに会話中の自己開示度とコミュニケーションパターンを検討した。その結果、会話相手の言語的関与よりも視線行動が二者間の開示に強く影響することが明らかになった。

このように言語的行動と非言語的行動との連関が確認できることから、二者間の会話行動での非言語的行動にも言語的行動での予測と同様に、客観的レベルの類似性の高い2人は、客観的レベルの類似性の低い2人よりも心理的に快適な会話行動ができると考えられる。

本研究の目的は、客観的レベルの二者間の類似性が、会話場面での二者間の行動に及ぼす影響を、明らかにすることである。従属変数となる会話行動レベルとしては、言語的行動、非言語的行動、生理的反応の側面から測定を行う。仮説としては、「客観的レベルの類似性の高い2人は、客観的レベルの類似性の低い2人より言語的行動、非言語的行動における親密性がより高いであろう。」

II. 方法

1. 被験者

大学生320人に、統(1964)のTest DELB-B-形式の質問紙調査を実験に先立って実施した。調

査は、1995年6月から1996年10月にかけて通常授業の一部を使い6回にわたり、ゼミなどの各クラスごとに行なった。最終的な被験者は、「高類似群」(二者間の距離得点 $M = 484.67$, $SD = 101.42$)と、「低類似群」(二者間の距離得点 $M = 984.67$, $SD = 111.34$)、各群3組の合計6組12名(女子学生)であった。

2. 手続き

①. 別室で待機させた2名の被験者を被験者A、被験者Bの順で図1.のように設営された実験室に入室させた。A、Bには、共に無作為に選出されたと告げた。

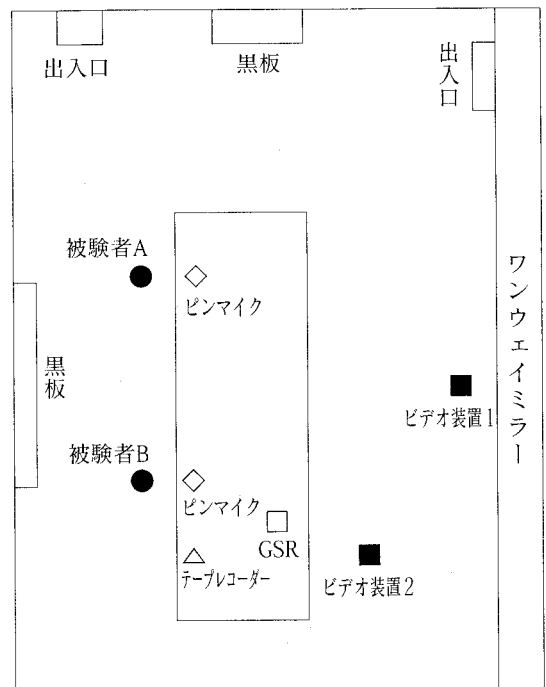


図1. 実験室の状態

②. 横に並んで着席するように指示した。間隔は50cm離れ、それぞれの椅子は内側に45°ずつ向かい合うようにした。2人の正面にあるワンウェイミラーはカーテンで隠し、ビデオ装置1は布で覆い、観察・撮影されていることを意識させないようにした。PGR(型式T.K.K.2701)の電極を各自の右手に装着し、精神反射電流の計測であることを伝えた。さらに、二者間の会話のモニター出力、およびテープレコーダでの録音のためのピンマイクをそれぞれの胸元に装着した。録音されている